

若年層の旅行と生活に関するアンケート調査の報告と一考察

著者	森下 晶美
雑誌名	観光学研究
号	7
ページ	19-28
発行年	2008-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00005101/

若年層の旅行と生活に関する アンケート調査の報告と一考察

森 下 晶 美*

1. 研究の目的と背景

日本人の海外旅行市場において、20～24歳のいわゆる若年層の旅行者は、1996年度をピークとして海外旅行者数、出国率共に徐々に減少傾向にあり、2004年度にはピーク時と比較して30%以上もその数が減少している。

海外旅行市場においてこの10年は、米国同時多発テロに始まる世界各地のテロや SARS といったマイナス要因が重なったこともあり、市場全体が浮き沈みの激しい時期となった。そのため、2000年度のピーク時には1,782万人あった海外旅行者数も2003年度には一時1,330万人にまで落ち込むといった現象が見られたが、その後は急速に回復し、2006年度には1,753万人にまで戻ってきている。

しかし、その中で20～24歳の若年旅行者だけが依然として減少傾向にあり、他の世代のセグメントの回復傾向とは異なった動きを見せている。2004、2005年度には若干の増加となったため、これを“若年層の海外旅行離れの下げ止まりである”との見方をする関係者もあるが、若年層の海外旅行の本質はどのようなのだろうか。

本研究では、まず、現在の若年層の旅行と生活に注目し、その実態をアンケートおよびヒアリング調査により探ってみたい。これにより、若年層の旅行観や価値観を明らかにし、現在の市場減少の傾向を踏まえた上で、これからの旅行市場における若年層の位置づけや活性化の可能性を考えてみたい。

2. 若年層の海外旅行者数の現状

20～24歳の若年層の海外旅行者数は1996年度の156万7,000人をピークとして年々減少傾向にあり、若年層の海外旅行者数が最も多かった96年度を100とした場合、2005年度には63.6と36.4%も減少している。これは、96年度の出国者数全体の1,670万人を100とした場合、2005年度では1,740万人で104と、全体では増加傾向であるのに対し正反対の現象となっている（表2—1）。

*東洋大学国際地域学部；Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

表2-1 20～24歳の出国者数と出国率（（ ）内は出国率）

（単位：万人）

	男 性	女 性	20～24歳全体	出国者全体
93年	520 (10.3%)	1,047 (21.8%)	1,567 (21.2%)	11,934 (9.6%)
96年	655 (13.1%)	1,362 (27.0%)	2,017 (26.6%)	16,695 (13.3%)
99年	533 (11.7%)	1,120 (25.8%)	1,653 (24.6%)	16,358 (12.9%)
02年	444 (11.0%)	864 (22.7%)	1,308 (22.4%)	16,523 (13.1%)
05年	436 (11.5%)	846 (23.5%)	1,282 (23.3%)	17,404 (13.8%)

人口減少分を考慮し、出国率でその動きを見ても、全体が0.5ポイントの増加であるのに対し、若年層では男性で1.6ポイント、女性で3.5ポイントの減少になる等、出国率においてもやはり全体の傾向とは異なった動きを見せている。特に、若年女性の減少が大きく、これまで海外旅行マーケットのけん引役のセグメントであったこの世代の減少傾向は、今後の旅行マーケットに大きな影響をもたらす可能性がある。こうした若年層における海外旅行者減少の要因は一体何か、若年層へのアンケートとヒアリングの調査から探してみたい。

3. 調査の方法

今回の調査は、森下ゼミ3年生（当時）28名を中心に、その友人、アルバイト先の同僚など、首都圏に住む18～25歳までの315名に、郵送およびヒアリングの形式でアンケートを実施した。男女別では、男性112名、女性203名、また、職業の有無では、学生309名、フリーター5名、その他1名となっており、若年層の中でも特に学生の旅行実態に焦点を当てた。このため、この研究でいう若年層とは18～25歳までの学生を指す。アンケートの実施期間は2006年8月～9月。

なお、観光学科の学生は、旅行への関心度が他の若年層より高いと考えられ、調査の結果にブレが出る恐れがあることから、あえてアンケートの対象から除外した。

4. 若年層の旅行の意識と実態

(1) 若年層の旅行の意識

まず、国内外を問わず、『過去3年間の宿泊を伴う旅行経験の有無』を尋ねたところ、286名、全体の90.8%が「ある」と答えた。一方、「ない」と答えた29名に、行かなかった理由を尋ねたところ、「時間がない」と答えたのが16名で全体の55%を占めた。次いで、「お金がない」が11名で38%、「時間」、「金銭」が足りないという理由で全体の93%を占めたが、中には「一緒に行く人がいない」という理由もあった。

次に、『海外旅行と国内旅行のどちらに興味があるか（行ってみたいか）』を尋ねたところ、「海外旅行」と答えたのが276名、「国内旅行」と答えたのが101名、「どちらも興味がない」と答えたのが

14名となり、全体の約88％は国内旅行よりも海外旅行に興味を持っていることが分かった。

さらに、「海外旅行の方に興味がある」と答えた276名に、『海外旅行に関する興味の理由と期待するもの』を複数回答で聞いたところ、最も多かったのは「日本と違う環境を体験したい」で141ポイント、次いで「行ったことのない場所へ行ってみたい」が92ポイント、「新しい発見がありそう」が85ポイントとなり、未知なるものへの期待度が高いことが分かる。一方で、若年女性の海外旅行目的のひとつとして近年クローズアップされている「癒しを求めて」は19ポイントに過ぎず、また、「TV や雑誌で見たので興味が湧いた」は10ポイントで、一般にマスメディアの影響を受けやすいと考えられている若年層だが、旅行に関しては意外に直接の影響は少ない、という結果となった（表4—1）。

表4—1 海外旅行に関する興味の理由と期待するもの
(複数回答) (単位：人)

日本と違う環境が体験できる	141
行ったことのないところへ行ってみたい	92
新しい発見がありそう	85
日本にない食べ物がある	79
語学の勉強になる	77
異文化体験が出来る	64
その国（地域）が好き	58
以前からなんとなく興味がある	42
一度は海外へ行ってみたい	39
癒しを求めて	19
TV や雑誌で見たところへ行ってみたい	10
その他	7
友人の勧め	5
パンフレットを見て行ってみたい	4
旅行会社の勧め	1

一方、国内旅行への興味度で『国内旅行に関する興味の理由と期待するもの』を複数回答で聞いたところ、「落ち着ける」と「費用面で手ごろ」が共に44ポイント、次いで「時間を掛けずに楽しめる」が40ポイント、「温泉に入りたい」が37ポイント、「手配・手続が簡単」が35ポイント、と手軽さ、気軽さが期待されていることが分かる（表4—2）。

表4—2 国内旅行に関する興味の理由と期待するもの
(複数回答) (単位：人)

海外より安い	44
落ち着ける	44
時間を掛けずに楽しめる	40
温泉に入りたい	37
手配・手続が簡単	35
土地のおいしいものを味わいたい	31
国内に魅力ある観光地がある	28
移動距離が短い	27
新しい発見がありそう	10
以前からなんとなく興味がある	6
友人の勧め	3
TV や雑誌で見たところへ行ってみたい	2
パンフレットを見て行ってみたい	2

(2) 若年層の海外旅行

次に若年層の旅行を海外旅行に焦点を当てて見てみたい。『過去3年間の宿泊を伴う旅行経験の有無』で経験が「ある」と答えた286名に、『過去3年間の旅行のうち海外旅行の経験はあるか』を尋ねたところ、72名が「ある」と答え、調査数315名のうち約22.5%が過去3年以内に海外旅行を経験していることが分かる。また、延べ人数の経験者は191名にのぼり、海外旅行に出掛けている層では、3年間に一人当たり平均2.65回の海外旅行経験をしていることが分かる。これは、『過去3年間の旅行のうち宿泊を伴う国内旅行の経験』に対する延べ人数が、909名で一人当たりの平均が3年間で2.89回であることと比較すると、意外に多い数といえる。こうした結果からは、海外旅行に出掛ける層と興味のない層の2つに大きな開きがあり、出掛ける層に関してはリピーター層として、繰り返し海外旅行に出掛けているが、興味のない層は全く行かない、という可能性を指摘することが出来る。

経験者の行き先では、米国（本土）が21名、韓国が20名、カナダが19名、オーストラリアが17名、グアムが16名（表4-3、延べ人数）となっており、比較的英語圏が多い。これは、語学研修や短期留学等で海外へ出掛けた学生層が多いからだとも考えることもできるが、同時に『海外旅行に出掛けた目的』を尋ねたところ、「観光」が144名で海外旅行経験者の延べ人数の75%を占め、「研修・短期留学」の33名を大きく上回った（図4-1）。

表4-3 過去3年間で行ったことのある国・地域（延べ人数）（単位：人）

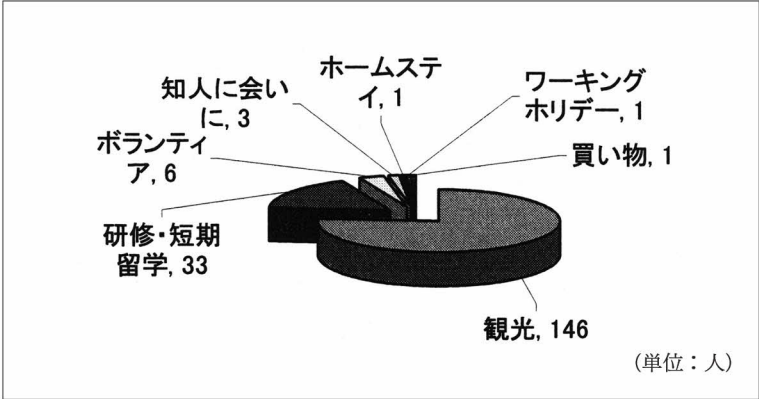
米国（本土）	21	シンガポール	3
韓国	20	マレーシア	3
カナダ	19	フィジー	3
オーストラリア	17	ニュージーランド	3
グアム	16	ドイツ	3
中国	15	フィリピン（セブ）	2
タイ	12	インド	2
フランス	8	ベトナム	1
サイパン	6	アイルランド	1
ハワイ	6	スイス	1
インドネシア（バリ島）	6	ベルギー	1
英国	6	ドバイ	1
イタリア	5	エジプト	1
台湾	4	南アフリカ	1
カンボジア	4		

さらに、『海外旅行の同行者』を尋ねたところ、「友人」が118名で最も多く、次いで「家族・親戚」24名、「一人旅」23名、「学校関係（学校やゼミ単位の研修等）」が17名となっており、多くの若年層旅行者は友人と海外旅行を経験している。また、『その海外旅行を提案したのは誰か』という問いに対しては、「本人」が95名、「友人」が44名、「学校」が40名、「家族・親戚」17名、「その他」5名の順となっている。

反対に、『過去3年間の宿泊を伴う旅行経験の有無』で経験が「ない」と答えた29名に『海外旅行に行ってみたいか』を尋ねたところ、「行ってみたい」と答えたのは24名、「行きたくない」と答え

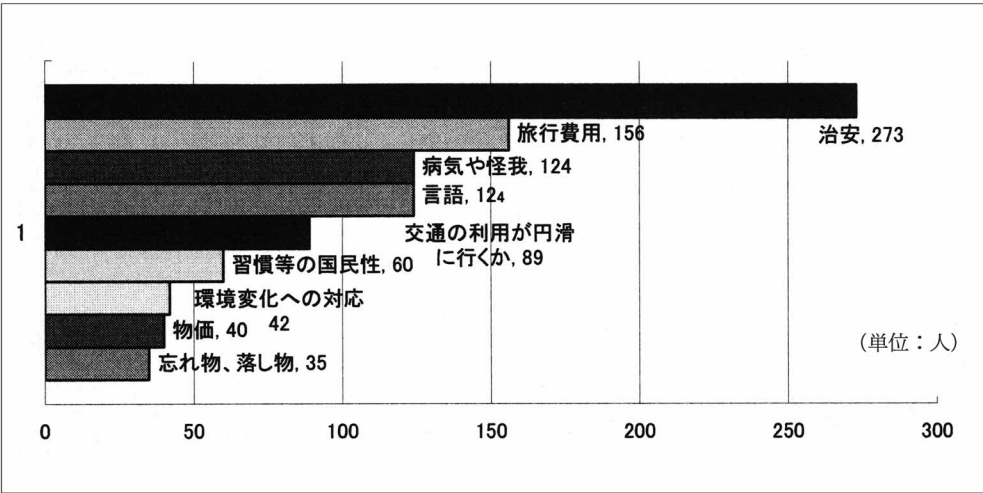
たのは5名で、過去3年間に国内外どちらの旅行も経験していない層においても80%以上が海外旅行に出掛けてみたい、と答えた。

図4-1 海外旅行に出掛けた目的（延べ人数）



「行きたくない」と答えた層の理由としては、「海外に興味がない」、「人ごみが嫌い」、「パスポートの取得等の準備が面倒」、「お金が掛かる」、「飛行機が嫌い」等が上がった。また、回答者全員に対して『海外旅行に出掛ける際に心配なこと』を複数回答で聞いたところ、「治安」が273ポイントで最も多く、次いで「旅行費用」156ポイント、「言語」と「病気や怪我」が共に124ポイント、「交通等の利用が円滑に行くか」が89ポイントとなっている（図4-2）。この結果には、ツーリズムマーケティング研究所が『海外旅行の阻害要因』として、2006年、沖縄を除く全国の15歳以上の男女1,200名に行った調査の結果と比較しても、大きな差異は見られなかった。

図4-2 海外旅行に出掛ける際に心配なこと（複数回答等）



さらに、同じ質問に関し、東洋大学国際地域学部1年生の38名に「若年層にとっての海外旅行の阻害要因」というテーマでディスカッションをしてもらったところ、「時間がない」、「お金がない」という意見の他、「パスポート取得等わからないことをするのは面倒」、「何となく海外は危ないというイメージがある」、「現地に行ってからうまく物事が運ばないと格好が悪い」、「国内旅行の方が安

心」、という意見が上がり、未知なるものに対する消極的な姿勢が目立ち、若年層の内向的な側面が伺われた。

しかし、これは海外旅行に関してだけの現象ではない。日本経済新聞が2007年6～7月に首都圏に住む1,200名あまりの20代若年層を対象に行った『生活意識や行動に関する調査』でも、乗用車やAV機器、海外ブランド品などの保有率は、2000年の調査と比較し、23品目中18品目で低下している反面、月々の自由になるお金の使い道で「貯蓄」を上げる人は36%と2000年の調査より8.2ポイントも上昇しているという。また、休日の過ごし方では、「ほとんど家にいる」や「家にいることが多い」が43.1%となり、家で「掃除・洗濯など家事をする」は2000年より7.9ポイントも上昇している。こうした堅実で小規模な暮らしぶりが、近年、20代の若年層に特徴的に見られ、これを表現するものとして“ミニマムライフ”、“1マイル消費”という言葉も現れているほどである。このように旅行だけでなく一般消費や生活観においても、近年の若年層の内向きで堅実な側面が浮き彫りになっているといえるだろう。

(3) 若年層のアルバイトと消費意識

実際に旅行に出掛けるにはある程度の時間とお金が必要なことから、次に、若年層のアルバイトと消費の実態を明らかにしてみたい。

まず、『現在、継続的なアルバイトをしているか』を尋ねたところ、「している」が212名、「していない」が103名で、67%が何らかの継続的なアルバイトをしていることが分かった。また、「している」と答えた212名に、『週何日（何回）くらいか』を尋ねたところ、2回、3回が最も多く全体の64%に上ったが（図4-3）、一方で「週5回以上」と答えた層も16%あった。さらに、『アルバイトは1日あたり平均何時間くらいか』という問いに対しては、半数以上の58%、124名が「4～5時間」と答え、多くの学生が1日あたり4～5時間のアルバイトを週2～3回行っていることが分かる。しかし、一方では1日あたり「8時間以上」と答えた層も23%おり（図4-4）、「週5回以上」、「1日あたり8時間以上」のアルバイトをしている学生も全体の15～20%いることになる。

こうした結果は、過去3年間で旅行に出掛けなかった理由のトップとなった「時間がない」を裏付けるものともいえ、アルバイトに忙しい学生の姿が想像できる。

図4-3 週平均で何回のアルバイトをしているか

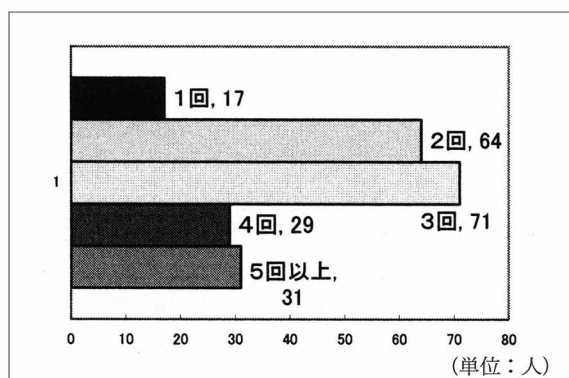
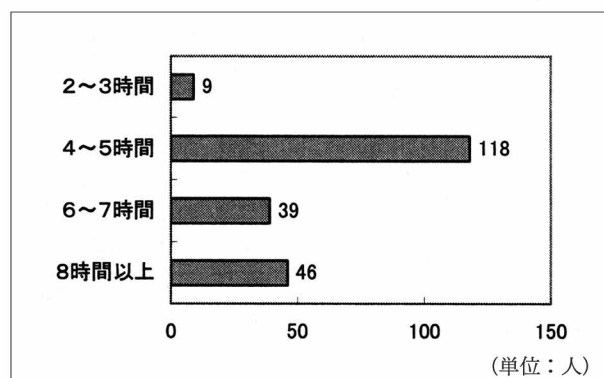
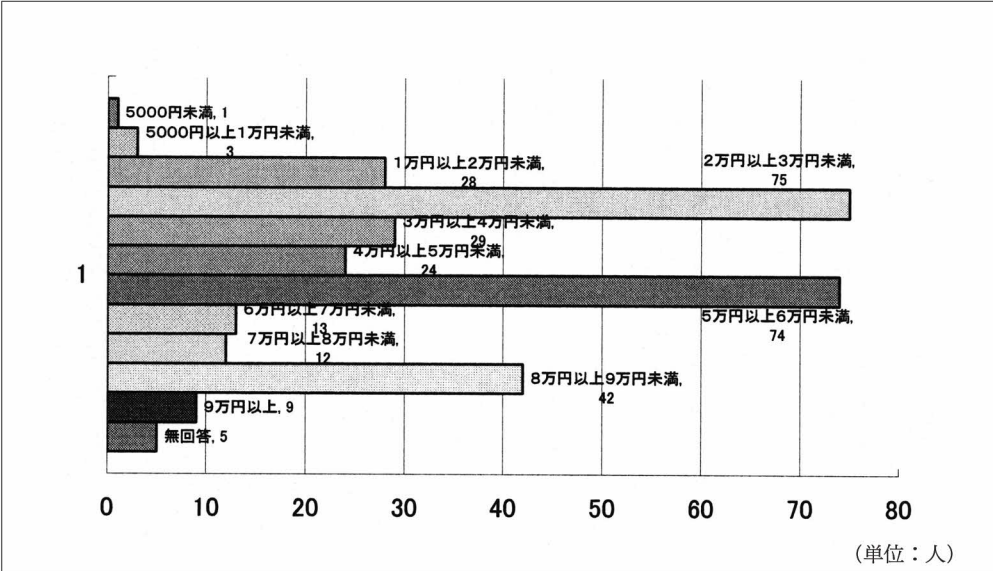


図4-4 1日あたりの平均アルバイト時間



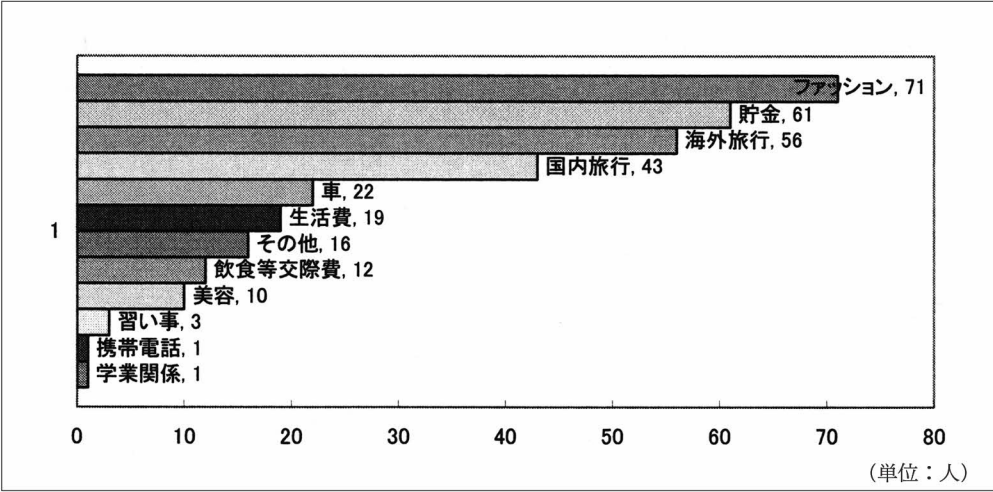
次に、消費の基盤を探るため、『1ヶ月のうち自由に使える金額はどのくらいか』を尋ねたところ、最も多かったのは「2万円以上3万円未満」で23.8%、次いで「5万円以上6万円未満」で23.5%となり、2万円以上6万円未満の間に64%が集中した。しかし、8万円以上と答えた層も16.2%に上り、裕福な学生生活をうかがわせたが、反面、2万円未満の層も10.2%あり、若年層の中でも経済的な格差が少なくないという結果となった（図4-5）。

図4-5 1ヶ月のうち自由に使える金額



それでは、本当に若年層では旅行への消費意欲が少ないのだろうか。『もし、10万円のお金があったら何に使うか』という問いをしてみたところ、「ファッション」が71名で最も多く、次いで「貯金」61名、「海外旅行」56名、「国内旅行」43名という結果となり、決して旅行への消費意欲が少ないわけではないことが読み取れる（図4-6）。

図4-6 もし、10万円のお金があったら何に使うか



また、野村総研（NRI）が2003年に行った「生活者1万人のアンケート調査」でも、『今後、積極にお金を使いたい分野』の全18項目に対して、「旅行費用」と答えた20～24歳の若年層は39.9ポイントに上った。この数字は他の世代の同項目と比較すると最も低いものの、20～24歳の消費意欲項目の中では、「衣類・ファッション」の54.4ポイント、「趣味・レクリエーション」の51.8ポイントに次いで3番目に高い値となっており、旅行消費意欲は低くない。

5. 海外旅行市場における若年層旅行者減少の要因

過去3年間に国内外どちらの旅行も経験していない層においても80%以上が海外旅行に出掛けてみたい、と答えていることや、旅行消費意欲の高さからも判断できるように、海外旅行を含めた若年層の旅行への意欲は決して低いものではない。しかし、近年の海外旅行市場における若年層旅行者減少は、97年以降の10年間、断続的に起きている確かな現象である。この一見、不整合とも見える現象の要因は何だろうか。

今回のアンケートの回答から減少の要因を考察すると、次の3つの可能性を指摘することができる。

(1) 未知なるものを回避する傾向（内向的志向）

前述4-(2)の「若年層にとっての海外旅行の阻害要因」についてのディスカッションに際する学生の発言からも分かるように、「なんとなく危ないイメージがある」、「物事がうまく運ばないと格好が悪い」といった、若年層の未知なるものを回避する傾向を見て取ることが出来る。こうした内向的志向は、ひとつの社会現象として近年さまざまな分野で指摘されているが、海外旅行の分野においてもその例外ではないようだ。

2007年10月に日経MJとNTTレゾナントが実施したインターネットとインタビューによる20代と35～44歳への旅行に関する意識調査においても、過去1年間に「海外旅行に出掛けていない」と答えたのは約75%で、その理由として「言葉が心配」14%、「なんとなく不安」が9.9%となり、35～44歳の層の同回答の約2倍となる結果となった。同調査によれば、「高い料金を払った挙句、想定外の不快な思いはしたくない」、「国内は好奇心の赴くままに安心して冒険が出来るから楽しい」といった感性が若年層に共通しているという。手軽で、気軽な旅行を好む傾向があるようだ。

このような興味や好奇心はあるものの想定外の不快な思いを嫌うという、未知を回避する傾向は、外国という言葉や文化、習慣の異なる未知な世界への旅である海外旅行に対しては、最も顕著に現れていると考えることが出来る。今回のアンケートにおいても約80%は「海外旅行に出掛けてみたい」と答えている他、海外旅行に期待するものという問いでも、「日本と違う環境が体験できる」がトップ、次いで「行ったことのないところへ行ってみたい」という答えが多数を占めた。このように海外への興味や好奇心はうかがえるものの、反面、実際に出掛けた層は22.5%に過ぎず、未知で面倒な海外旅行を躊躇する若年層の姿を見て取ることができた。こうした傾向は、近年、海外旅行マー

ケットで起こっていた「安・近・短」の傾向に、手軽、気軽という「軽」が加わったことを意味すると考えられる。

(2) 経済基盤と消費の二極化（経済的要因）

4―(3) の「1ヶ月のうち自由になるお金」の金額分布からも分かるように、1ヶ月のうち5万円以上が自由になると答えた層は全体の47.6%もあり、裕福な学生生活が想像できる。中には、8万円以上と答えた層も16.2%あった。しかし、一方で2万円未満の層は10.2%、2～3万円の層は23.8%と、その差が大きい。図4―5でも分かるように、全体の分布では「2万円以上3万円未満」の層と、「5万円以上6万円未満」、「8万円以上9万円未満」の層が目立つ形となり、経済基盤の上でも二極化が見られる結果となった。

さらに、消費の面でも二極化の傾向が見られる。4―(2)でも述べた通り、過去3年以内の海外旅行経験者の延べ人数は191名にのぼり、海外旅行に出掛ける層においては一人当たり平均2.65回の海外旅行経験をしていた。これを、さらに詳細に調べると、過去3年間に「3回以上の海外旅行を経験している」ほぼ毎年のように海外旅行に出掛けている層と「1回または0回」のほとんど海外旅行の経験がない層に分かれ、ここにも二極化の傾向が見られることが分かった

演劇、映画、アート、書籍等のエンターティメント分野に関する消費は、各分野に「大きな関心がある」層と「多少関心がある」、「あまり関心がない」層の消費に大きな差があり、「大きな関心がある」層と「あまり関心がない」層の消費額には最大で13倍の差異が生じることが、近年報告されている。こうしたことから、海外旅行においても、若年層全体が海外旅行に関心が薄くなってきているというよりは、むしろ、「出掛ける」層と「あまり出掛けない」層に大きく分かれてきている、という可能性が大きい。

(3) アルバイト重視の傾向（時間的要因）

4―(3) で述べたアルバイトの実態からも分かるように、アルバイトに忙しい学生は多い。週に2～3回、1日あたり4～5時間というのが平均的な学生のアルバイト実態のようであるが、中には「週5回以上」、「一日あたり8時間以上」のアルバイトをしている学生も全体の15～20%いることが分かった。

今回のアンケートでも、休日の過ごし方に関する問いを行ったところ、『休日の外出目的』で最も多かったのは「アルバイト」で、次いで「友人と会う」、「ショッピング」、「デート」の順となった。また、『長期休暇（夏休み等）の過ごし方』でも最も多かった答えは「アルバイト」で、次いで「旅行」、「帰省」、「自宅にいる」となった。こうした結果からはアルバイトに精を出す学生の姿が浮かび上がるが、これはすなわち、時間のなさにも直結する。今回のアンケートとヒアリングでも、旅行に行かなかった理由として「時間がない」という意見がトップに上がったが、時間のない理由の大きな要因のひとつにはアルバイトを上げることが出来るだろう。

6. まとめ

若年層の海外旅行者減少の要因として、今回のアンケートからは、海外旅行に興味はあるものの、「なんとなく危ない」、「想定外の不快な思いはしたくない」、「国内のほうが手軽」といった未知のものや面倒なものを回避する傾向から、海外旅行を躊躇する若年層の一側面が浮かび上がった。

しかし、こうした傾向は必ずしも若年層に一樣ではなく、経済的な基盤や消費の傾向にも二極化が見られた。経済的な基盤では、「自由になるお金がある層」と「遊ぶお金のない層」に分かれる傾向にあり、海外には行きたいが行けない層があることも減少の要因となっていることが分かる。消費の傾向では若年層においても「海外旅行によく出掛ける層」と「海外にはほとんど出掛けない層」に分かれ、ハードリピーターと未経験者の差も大きい。以前のような“学生のうちに1～2回の海外旅行を経験する”といった平均的な学生像が描きづらくなってきているようだ。

また、“時間がないため海外旅行には出掛けられない”という時間の不足を説明する大きな要因のひとつはアルバイトであることも明らかとなった。アルバイトで得たお金は主にファッションや貯金に費やされており、若年層においては、海外旅行の競合は他の消費ではなく貯蓄であるという側面も見て取れた。

今回の調査では学生の旅行と生活の実態を調べたが、次の研究課題としては、内向的な傾向と海外旅行の経験の有無との関係や海外旅行のハードリピーターの旅行頻度の詳細、特に減少の大きい若年女性の価値観などを調べてみたい。これにより、これからの旅行市場を左右する若年層の旅行観がさらに明らかになると思われる。

【参考文献】

- 『JTB リポート2007日本人海外旅行のすべて』、ツーリズム・マーケティング研究所、2007年
日経流通新聞 2007年8月22日号
日経流通新聞 2007年10月19日号
野村総研、『生活者1万人のアンケート』 <http://www.nri.co.jp/opinion/r-report/survey/index.htm>
博報堂 研究開発局、『調査レポート』 <http://www.h-foresight.com/investigative-report.html>
『旅行者動向2006 国内・海外旅行者の意識と行動』、財団法人日本交通公社、2006年7月
『マーケット・インサイト2006』、財団法人日本交通公社、2006年7月